

平成 19 年度病虫害発生予報第 8 号

平成 19 年 9 月 5 日
鳥取県病虫害防除所

予報の概要 [参考]

区 分	農 作 物 名	病 害 虫 名	発 生 時 期	予 想 発 生 量
普通作物	ダイズ	ハスモンヨトウ	-	やや少ない
		カメムシ類	-	やや多い
果 樹	ナ シ	黒斑病	-	やや多い
		ハダニ類	-	やや多い
		クワコナカイガラムシ	平 年 並	やや多い
		シンクイムシ類	平 年 並	やや多い~多い
	ブドウ	べと病	-	やや多い
ブドウトラカミキリ		平 年 並	平 年 並	
チャノキイロアザミウマ		やや遅い	平 年 並	
	ハマキムシ類	平 年 並	平 年 並	
リンゴ	ハダニ類	-	やや多い	
共通 ナシ、カキ、リンゴ	カメムシ類	-	平 年 並	
野 菜	ネ ギ	黒斑病	平 年 並	平 年 並
		ネギハモグリバエ	平 年 並	平 年 並
		ネギアザミウマ	平 年 並	やや多い~多い
	キャベツ ブロッコリー	べと病	平 年 並	平 年 並
		黒腐病	平 年 並	平 年 並
		軟腐病	平 年 並	平 年 並
		コナガ	平 年 並	やや多い
		ヨトウムシ	平 年 並	平 年 並
		ハイマダラノメイガ	平 年 並	平 年 並
	トマト、ミニトマト	疫病	平 年 並	平 年 並
	ナガイモ	炭疽病	平 年 並	やや多い
		ヤマノイモコガ	平 年 並	やや多い
		ハダニ類	平 年 並	やや多い
トマト、ミニトマト キャベツ、イチゴ	ハスモンヨトウ	平 年 並	平 年 並	
ネギ、ナガイモ	シロイチモジヨトウ	平 年 並	やや多い	
シ バ	さび病	平 年 並	平 年 並	
	スジキリヨトウ	平 年 並	平 年 並	
	シバツトガ	平 年 並	平 年 並	

気象予報 (抜粋)

1 か月予報 (9 月 1 日 ~ 9 月 30 日 : 8 月 31 日、広島地方气象台発表)

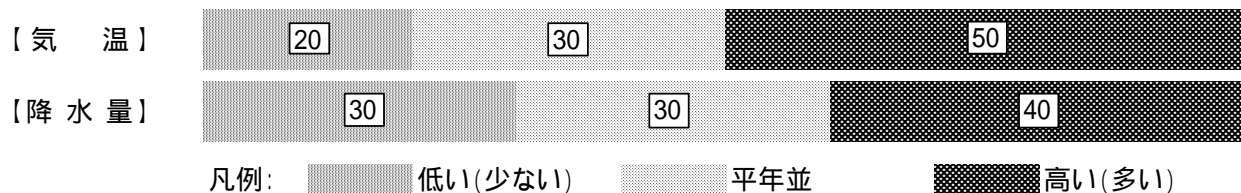
向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量などの確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わりますが、一時天気のぐずつく時期があるでしょう。

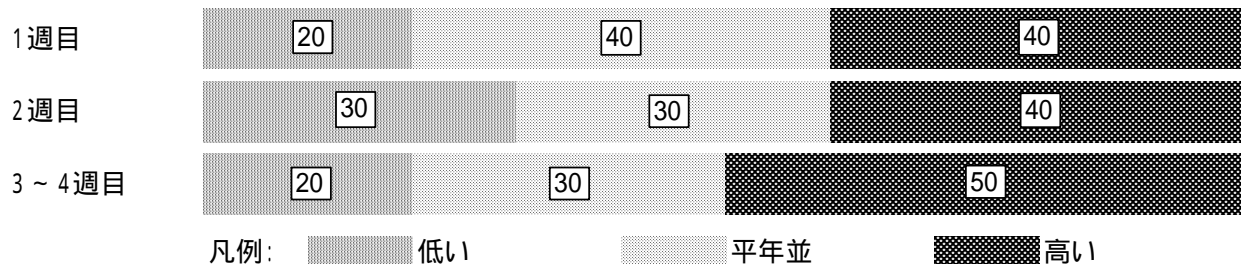
向こう 1 か月の気温は、高い確率 50% です。

週別の気温は、1 週目は平年並又は高い確率ともに 40% です。3 ~ 4 週目は高い確率 50% です。

< 向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%) >



< 気温経過の各階級の確率(%) >



普通作物

[ダイズ]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 8月第5半旬現在、フェロモントラップにおける雄成虫の総誘殺数は、平年に比べて少ない。しかし、8月第2半旬以降誘殺数が増加しているため、今後も幼虫による被害が増加するものと見込まれる。

イ 8月22日現在、発生ほ場率は69.0% (平年: 75.0%) と平年並の発生であるが、1a当たりの平均白変葉か所数は0.4か所 (平年: 1.2か所) と平年に比較して少ない発生となっている。

ウ 向こう1か月の気象によると、本虫の発生に好適な条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 若齢幼虫の加害によって発生する白変葉の早期発見に努め、発生初期の場合、葉の切除などによる捕殺を行うか、防除指針などを参考に防除を行う。

イ 防除の目安は、1a当たりの白変葉か所数5か所以上とする。なお、新葉の出葉により、白変葉が確認しにくいほ場が多いので、観察に当たっては、ほ場周辺からの観察のみならず、ほ場内での観察も行う。

ウ 若齢幼虫に対する防除薬剤の効果は高いが、齢期が進むと防除効果が劣るため、防除適期を失しないようにする。

2 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月22日現在、本ほではホソヘリカメムシ、イチモンジカメムシ、アオクサカメムシなどの発生がみられ、発生ほ場率は47.2% (平年: 36.2%) と平年よりやや多い発生である。また、25株当たり平均成幼虫数は0.9頭 (平年: 0.8頭) と平年並の発生となっている。

イ 8月第5半旬現在、予察灯における総誘殺数はやや多くなっている。

ウ 向こう1か月の気象によると、本虫の発生に好適な条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

近年、9月以降に密度が急増する傾向があるため、現在、発生密度が低いほ場であっても、今後の発生状況に注意し、発生が多い場合は追加防除を行う。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病(平成19年7月24日付,病虫害発生予察注意報第3号発表)

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地における新梢葉での発病は、平年をやや上回った。

イ 向こう1か月の気象予報によると、本病の発生に好適な条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 新梢葉の発病増加と花芽への感染を防ぐため、収穫終了後の薬剤散布を徹底する。

イ 薬剤は、収穫終了後にアントラコール顆粒水和剤500倍液又はアリエッテIC水和剤800倍液などを散布する。

ウ 越冬菌密度を下げるため、落葉後(11~12月)の落葉処分を励行する。

2 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場(北栄町)におけるハダニ類(主にクワオオハダニ)の発生はやや多くなっている。

イ 現地では、ハダニ類の多発生により葉焼け症状となっているほ場が一部で認められている。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、ハダニ類の発生にやや好適な条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発園では、収穫が終わり次第薬剤を散布する。

イ 防除薬剤は、病虫害防除指針を参考とする。

ウ 近年、越冬ダニによる春期の被害が認められている。特に、収穫中にハダニ類の発生が多く認められる園では、収穫後の防除を徹底する。

3 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 現地の一部のナシ園では被害果がやや多く発生している。

イ 県予察ほ場における本虫の発生量は平年並となっている。

ウ 第2世代の幼虫ふ化時期は、ほぼ平年並の8月下旬~9月上旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 秋期に本虫の発生が認められる園では、翌年に多発する可能性が高いので、収穫後の防除を徹底する。
- イ 多発園では、収穫が終わり次第ダイアジノン水和剤34の1,000倍液などを散布する。

4 シンクイムシ類(平成19年7月13日付,病害虫発生予察注意報第1号発表)

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多~多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月中旬現在、ナシ園設置(北栄町ほか3地点)のフェロモントラップにおけるシンクイムシ類の誘殺数はほぼ平年並である。
- イ 平成18年度から開始した、県内5地点のフェロモントラップにおけるシンクイムシ類の誘殺数は、多発した前年より多い地点が認められている。
- ウ 現地の一部のナシ園では、シンクイムシ類による果実被害が認められている。
- エ 向こう1か月の気象予報及びこれまでの発生経過から、ナシヒメシンクイの第4世代成虫(第5回成虫)の発生時期は平年並の9月中旬~下旬と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 今後、晩生品種(新高、新興、王秋など)の被害発生が予想されるため防除を徹底する。特に、二十世紀などで被害が多かった地域では、被害発生が懸念されるので注意する。
- イ 薬剤は少発生園ではDDVP乳剤1,000倍液などを、多発生園ではアグロスリン水和剤2,000倍液などを散布する。なお、薬剤の散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守する。

[ブドウ]

1 ベと病

(1) 予察の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地における発病は平年をやや上回った。
- イ 向こう1か月の気象予報によると、本病の発生に好適な条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 秋季の発病は早期落葉と越冬菌密度の増加につながるので、収穫終了後の薬剤散布を1~2回行う。
- イ 薬剤は、収穫終了後にICボルドー48Qの50倍又は3-2式~6-3式ボルドー液を散布する。

2 ブドウトラカミキリ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 県予察ほ場(北栄町)における本虫の発生量は、ほぼ平年並となっている。
- イ 本虫の成虫羽化最盛期は、ほぼ平年並の8月下旬~9月上旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 防除適期は9月中旬頃であり、薬剤はスミチオン水和剤40の800倍液などを散布する。
- イ 本虫の羽化は長期間に及ぶため、9月の防除では十分な効果が得られない場合がある。そのため、被害が多い園では、必ず10月中旬にモスピラン水溶剤2,000倍などを散布する。

3 チャノキイロアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、県予察ほ場及び現地ほ場における被害の発生はやや少なく、発生時期もやや遅い。
- イ 向こう1か月の気象予報によると、本種の発生にやや好適な条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 多発園では、収穫終了後にパダンSG水溶剤1,500倍液などを散布する。
- イ 9月に発生が増加すると越冬量が多くなり、翌年の発生源となるため、多発園では防除を徹底する。

4 ハマキムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、フェロモントラップにおける誘殺数は平年と比較して少ない。
- イ 県予察ほ場では、7月下旬から被害果房が散見され、8月下旬現在、平年並の発生量である。また、現地では、8月上旬頃から被害が認められ、8月中旬以降に被害が増加した。
- ウ 向こう1か月の気象予報とこれまでの発生経過から、次世代成虫の発生ピークは9月中～下旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 多発園では、9月下旬にダイアジノン水和剤34の1,000倍液などを散布する。
- イ 近年、秋季の気温が高めに推移し、9月以降多発生となるほ場が認められる。秋季の発生は越冬密度を高め、翌春の発生量の増加を招くため、収穫後であっても注意してほ場を観察する。

[リンゴ]

1 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、県予察ほ場(北栄町)におけるハダニ類の発生量は平年並となっている。
- イ 向こう1か月の気象予報によると、ハダニ類の発生にやや好適な条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

発生が認められる場合は、カネマイトフロアブル1,500倍液などを散布する。

[共通(ナシ、カキ、リンゴ)]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、予察灯におけるチャバネアオカメムシの誘殺数は平年並～多い。

また、予察灯におけるクサギカメムシの誘殺数は八頭町、湯梨浜町でやや多い。

イ 集合フェロモントップにおけるチャバネアオカメムシの誘殺数は、全調査地点で少ない。

ウ 8月31日現在、県予察ほ場(殺虫剤無散布、無袋のゴールド二十世紀)では、カメムシ類の飛来を確認していない。

エ 向こう1か月の気象予報によると、カメムシ類の活動にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果樹園内にカメムシ類の発生が認められる場合は、病害虫防除指針を参考に薬剤を散布する。

イ 予察灯の誘殺数が増加しているので、果樹園への飛来に注意をするとともに、農家間などで情報の共有を徹底する必要がある。今後、山林で餌不足となった場合などでは、カキなどを中心に果樹園に飛来する恐れがある。そのため、定期的に果樹園やサンゴジュなどを観察し、早期発見に努める必要がある。

野 菜

[ネギ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地ほ場での発生量は、ほぼ平年並である。

イ 本病は平均気温25前後が発病適温であり、降雨が多い場合に多発する。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足になると発病しやすいので、肥培管理に注意する。

イ 薬剤は、ダコニール1000の1,000倍液、ポリベリン水和剤1,500倍液などを発病初期から散布する。発病が増加する場合は、ロブラール水和剤1,000～1,500倍液などを散布する。

2 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年に比べてやや少ない。
- イ 県予察ほ場（北栄町）における発生量は、平年並である。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生にやや好適な条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、アクタラ顆粒水溶剤1,000～2,000倍液、ダントツ水溶剤2,000～4,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液などを7～10日間隔で薬剤を替えて散布する。

3 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 やや多い～多い

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は、ほぼ平年並であるが、一部で多発ほ場が見られる。
- イ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生にやや好適な条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

アクタラ顆粒水溶剤1,000～2,000倍液、ダントツ水溶剤2,000～4,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液、ランネット45DF1,000～2,000倍液、モスピラン水溶剤2,000倍液、アドマイヤーフロアブル2,000～4,000倍液などを7～10日間隔で薬剤を替えて散布する。

[キャベツ、ブロッコリー]

1 べと病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地調査ほ場での発生は認められていない。
- イ 本病は気温が比較的低温、降雨が多いと発生が多くなる。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア キャベツでは、ヨネポン水和剤500倍液、ダコニール1000の1,000倍液、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤）400～600倍液、リドミルMZ水和剤1,000倍などを予防散布する。
- イ ブロッコリーでは、花蕾に発生するべと病の防除を対象に、リドミルMZ水和剤の1,000倍液を10月から10日間隔で2～3回散布する。なお、本剤は花蕾形成前までの散布とする。

2 黒腐病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 8月下旬現在、現地調査ほ場での発生は認められていない。
- イ 本病は、降雨が多いと発生が多くなる。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 害虫の食害痕も病原菌の侵入口となるため害虫防除を徹底する。

イ 肥料不足になると多発しやすいため、肥料切れしないよう注意する。

ウ 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風の直後には、天候の回復を待ってできるだけ早く薬剤散布する。

エ キャベツでは、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー、銅水和剤）1,000倍液、ドキリンフロアブル500～1,000倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

オ ブロッコリーでは、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー、銅水和剤）1,000倍液、キノンドー水和剤40の800倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

3 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場での発生は認められていない。

イ 本病は、気温が比較的高く、降雨が多いと発生が多くなる。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 害虫の食害痕も病原菌の侵入口となるため、害虫防除を徹底する。

イ 発生前の予防防除を行う。特に大雨や台風の直後には、天候の回復を待ってできるだけ早く薬剤散布する。

ウ キャベツでは、カスガマイシン・銅水和剤（カスミンボルドー、銅水和剤）1,000倍液、ドキリンフロアブル800～1,000倍液、ヨネポン水和剤500倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

エ ブロッコリーでは、ナレート水和剤1,000倍液、Zボルドー500倍液などを散布する。

4 コナガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）におけるフェロモントラップの誘殺数は平年並である。

イ 現地調査ほ場における発生量は平年に比べてやや多い。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生にやや好適な条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 苗床で発生が認められる場合には、BT剤（ゼンターリ顆粒水和剤

1,000～2,000倍液など）、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液などを散布する。

イ 定植時にはガゼット粒剤1～2g/株、モスピラン粒剤1～2g/株、オンコルマイクログラブル200倍（セルトレイ灌注）などを施用する。

ウ 本ほでの発生初期には、アフーム乳剤1,000～2,000倍液などを散布し、その後、アタプロン乳剤2,000倍液、トルネードフロアブル1,000～2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液などを7～

10日おきに散布する。

5 ヨトウムシ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生にやや好適な条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア キャベツでは、発生初期には、オルトラン水和剤1,000～1,500倍液などを散布する。その後、アフーム乳剤1,000～2,000倍液、アタブロン乳剤2,000倍液、トルネードフロアブル2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液などを散布する。

イ ブロッコリーでは、発生初期には、オルトラン水和剤1,000倍液などを散布する。その後、アフーム乳剤1,000～2,000倍液、マトリックフロアブル1,000～2,000倍液、ランネット45DFの1,000倍液などを散布する。

6 ハイマダラノメイガ(ダイコンシンクイムシ)

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場における発生量はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生にやや好適な条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア キャベツでは、アフーム乳剤1,000～2,000倍液、スピノエース顆粒水和剤5,000倍液、トルネードフロアブル2,000倍液などを、1週間程度の間隔で散布する。

イ ブロッコリーでは、プリンスフロアブル2,000倍液などを、1週間程度の間隔で散布する。

[トマト、ミニトマト]

1 疫病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地ほ場での発生量は、ほぼ平年並である。

イ 本病は、気温20℃前後で施設内が多湿となる場合に多発する。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 換気を良好にし、過度にかん水を行わないように注意する。

イ トマトでは、発病前から定期的にマンゼブ水和剤(ジマンダイセンフロアブル、ペンコゼブフロアブル)1,000倍液、ダコニール1000の1,000倍液、ランマンフロアブル1,000倍などを散布する。初発生確認後は、リドミル銅水和剤400～600倍液、フェスティバルC水和剤600～800倍液などを

散布する。

ウ ミニトマトでは、発病前から定期的にペンコゼブフロアブル1,000倍、ダコニール1000の1,000倍液、ランマンフロアブル1,000倍などを散布する。初発生確認後は、リドミル銅水和剤400～600倍液などを散布する。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地ほ場における発生量は平年に比べてやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報によると、引き続きやや多い発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。

イ 茎葉が繁茂して薬液がかかりにくい状態なので、丁寧に薬剤を散布する。

ウ 大雨や台風の直後に、天候が回復した後できるだけ早く薬剤散布する。

エ 防除薬剤は、ダコニール1000の1,000倍液、ジマンダイセン水和剤400～600倍液などを散布する。

オ ムカゴを収穫する場合は、栽培指針を参考にしながら、薬剤を選択する。

2 ヤマノイモコガ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生にやや好適な条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア アタブロン乳剤2,000倍液、トレボン乳剤1,000倍液、メラード水和剤1,000倍液などを7～10日間隔で2回程度散布する。

イ 茎葉の繁茂により薬液が葉裏にかかりにくいので、薬剤散布は丁寧に行う。

ウ ムカゴを収穫する場合は、栽培指針を参考にしながら、薬剤を選択する。

3 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場における発生量はやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生にやや好適な条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤は、ニッソランV乳剤1,000～1,500倍液、コロマイト乳剤1,000倍液、コテツフロアブル2,000倍液などを葉裏にも薬剤が付着するように丁寧に散布する。

イ ムカゴを収穫する場合は、栽培指針を参考にしながら、薬剤を選択する。

[トマト、ミニトマト、キャベツ、イチゴ]

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）におけるフェロモントラップの誘殺虫数はやや少ない。

イ 現地調査ほ場（キャベツ）における発生量はやや少ないが、一部のほ場では卵塊が見られ始めている。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生にやや好適な条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤の感受性が高い若齢幼虫のうちに防除を行う。ほ場内をよく観察し、発生がみられる場合には直ちに防除を行う。

イ トマト及びミニトマトでは、若齢幼虫期にアタブロン乳剤2,000倍液、マッチ乳剤3,000倍液、デルフィン顆粒水和剤1,000倍液などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合には、プレオフロアブル1,000倍液などを散布する。

ウ キャベツでは、若齢幼虫期にアタブロン乳剤2,000倍液、ノーモルト乳剤2,000倍液などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合には、トルネードフロアブル2,000倍液、アフーム乳剤1,000～2,000倍液、マトリックフロアブル2,000倍液などを散布する。

エ ブロッコリーでは、カスケード乳剤4,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液などを散布する。

オ イチゴでは、若齢幼虫にアタブロン乳剤2,000倍液、マッチ乳剤3,000倍液、ラービンフロアブル1,000倍液などを散布する。中～老齢幼虫が見られる場合には、アフーム乳剤2,000倍液、トルネードフロアブル2,000倍液などを散布する。

[ネギ、ナガイモ]

1 シロイチモジヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）におけるフェロモントラップの誘殺虫数は平年並である。

イ 現地巡回ほ場（ネギ）における発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生にやや好適な条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 若齢幼虫期が防除適期である。これを逃すと極めて防除が困難となるため、早期発見に努め、早めに防除を行う。

イ ネギの防除薬剤は、9月上旬にランネート45DFの1,000倍液、アタブロン乳剤2,000倍液、コテツフロアブル2,000倍液などを散布する。

ウ ナガイモの防除薬剤は、デルフィン顆粒水和剤1,000倍液を用いて、5～7日間隔で2回程度防除を行う。

[シバ]

1 さび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地調査ほ場での生産シバにおける発生量は、ほぼ平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報によると、今後平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期にバシタック水和剤75の500～1,000倍液、バイレトン乳剤2,000倍液などを散布する。

2 スジキリヨトウ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地ほ場におけるフェロモントラップの誘殺虫数はやや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生にやや好適な条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

若齢幼虫を対象にダイアジノン乳剤40、スミチオン乳剤の1,000倍液、ダズバン乳剤40の1,000～1,500倍液、スカウトフロアブル1,500倍液などを散布する。

3 シバツトガ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 8月下旬現在、現地ほ場におけるフェロモントラップの誘殺虫数は平年並～やや少ない。

イ 向こう1か月の気象予報によると、本虫の発生にやや好適な条件である。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、ダイアジノン乳剤40、スミチオン乳剤の1,000倍液、ダズバン乳剤40の1,000～1,500倍液、スカウトフロアブル1,500倍液などを散布する。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、
周辺への飛散には充分注意しましょう。**

< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jpnpn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報やフェロモントラップの調査結果(野菜の各種害虫、果樹のシクイムシ類)、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647

E-mail : boujyot@titan.ocn.ne.jp

次回の予報発表は、10月4日(木)の予定です。